

## オラトリオの状態についてのローマからの手紙

イエズス・キリストにおいて愛する子供たちよ。

近くにいても遠く離れていても、私はいつもあなたたちのことを考えます。私の望みは、ただ一つです。あなたたちがこの世でも永遠でも、いつも幸せであるように。この考えと望みにせき立てられて、この手紙を書き送ることにしました。

私の愛する子どもたちよ、私はあなたたちから遠く離れていることをつらく思います。あなたたちの顔を見、声をきくことができないのは、あなたたちが想像する以上に大きな悲しみです。この手紙を、もう一週間前に書こうと思っていましたが、用事が多くてできませんでした。私は間もなく帰りますが、今すぐにはありませんので、せめて手紙の中で、一足早くあなたたちのもとへ帰りたいたいと思います。

これは、イエズス・キリストのうちにあなたたちを深く愛し、父親のようになんでも話すつとめがある人のことばです。あなたたちはきっと、私に自由に話させてくれるでしょう、そして私のことばを注意して聞き、受け入れて、実行に移してくれるだろうと思います。

私はあなたたちが、私の心の唯一の、絶え間ない考えの対象だと断言しました。さて、つい先晩のこと、私は寝室にはいって床に就くまえに、私のもっとも愛する母から教えられた祈りを唱え始めました。ちょうどそのとき、眠気のあまりにそうなったのか、気を散らしたためにそうなったのかわかりませんが、オラトリオでむかし教えた二人の生徒が現われるのを見ました。

そのうちの一人が近よってきて、親しげにあいさつして、言いました。

「神父さま、私をご存じですか」

「知っています」 私は答えました。

「私のことをまだ覚えておいでですか」と、彼は続けました。

「あなたのことも、友だちもみんな覚えています。あなたはヴァルフレ君です。一八七〇年ごろオラトリオにいたでしょう」

「あの当時オラトリオにいた子どもたちをごらんになりたいですか？」ヴァルフレは私にたずねました。

「見せてください。どんなにうれしいでしょう」 私は答えました。

すると、ヴァルフレは、当時の子どもたちを見せてくれましたが、姿も、背丈も年齢もみんな当時のままでした。昔のオラトリオで、ちょうど休み時間のように見えました。みんな元気にあばれまわってはしゃいでいました。走ったり、飛んだり、跳ねたりする子どもたち。こちらで、蛙飛びをしている子どもがいれば、あちらで、陣とりやボールで遊んでいる子どももいました。数人の子どもたちが集まって、一人の神父といっしょに遊んだりしていました。

どこにも、歌ったり笑ったりする子どもたちがいて、どこを向いても、子どもたちに取り囲まれた神学生と神父たちの姿が見えました。みんな大よろこびで、先生がたと生徒たちのあいだに、心のふれあいと親しみの溢れているのが感じられました。私はこのようすに、有頂天になっていました。そのときヴァルフレが、こう言いました。

「ごらんください。親しみは愛を生み、愛は信頼を生みます。こうして子どもたちは、心をひらき、恐れることなくなんでも先生や担任や目上たちに打ち明けます。告解のときばかりでなく、いつでも、すべてを率直に話します。そして、愛してくれる人をよく知っていて、目上がなにを命じても、子どもたちはよろこんで従います」

そのとき、もうひとりの生徒が近づいてきました。ジョゼッペ・ブツェッティで、ひげはまっ白くなっていました。

「ドン・ボスコ、今オラトリオにいる子どもたちを見たいですか」と彼がききました。「見たいですとも。もう一ヶ月も見えていないのですから」と私は答えました。

彼が指さしたところを見ると、オラトリオと、そこで休み時間を過ごしているあなたたちが見えました。しかし、第一の場面で見たような歌声も、よろこびの声もなく、活気に溢れた遊びなども見えませんでした。

たくさんの子どものふるまいと顔とに、退屈や嫌気や、不満や警戒心が現われていました。これを見て私の心は悲しくなりました。

もちろん、夢中になってあばれまわったり、遊んだりしている子どもたちもたくさんいましたが、ひとりぼっちで柱によりかかり、沈んだ表情をしている子どもたちも少なくありませんでした。

ある者は、階段や廊下や、庭に面したバルコニ - にすわって、みんなといっしょに遊ぶのを避けていました。ある者のたちは、グル - プをつくって、ゆっくり歩きながら、こそそ話し合ったりしていましたが、目つきが良くないという感じを受けました。笑ったりもしていましたが、その笑いには、いやらしさがあり、彼らの話を聖アロイジオが耳にしたら、恥ずかしい思いで赤面したにちがいないと思われるほどでした。遊んでいる子どもたちの中に、やる気がなくつまらなさそうにしている者がいました。

「あなたの子どもたちをごらんになりましたか」 卒業生が言いました。

「見ました」と、ため息をもらしながら、私は答えました。

「むかしの私たちと、ずいぶん違います」と彼は、声を大にして言いました。

「残念ながらそうです。休み時間の遊びにさえ、こんなに退屈しています」

「この退屈が原因で、多くの子どもたちは、宗教行事に冷淡になり、お聖堂やめいめいの場所でするお祈りをなおざりにしてしまいます。このために、神が多くの恵みを準備して下さるこの学校にいるのが、いやになっています。なお、このためにまた多くの人が神の呼びかけに応えません。ここから、目上に対する不満、不平、かくしだてという、よくない結果が生まれてきます」

「わかりました」 私は答えました。「しかし、私の愛するこの子どもたちが、もとのように活発で、よろこびにあふれた率直な態度を取り戻すには、どうすればよいのでしょうか」

「愛をもってすることです」

「愛ですって？ では、この子どもたちが十分に愛されていないとでも言うのですか。私が、どれほど彼らを愛しているか、ご存じでしょう。私が四十年の長いあいだ、この子どもたちのためにどれほどの苦しみや困難を耐え忍んだかを、そして、今もなお耐えているかを、あなたにご存じでしょう。彼らに食べものと住まいと教師を与えるためだけでなく、それ以上に、彼らに靈魂の救いを得させるため、どれほど努力し、はげしい反対や迫害を耐え忍んだことでしょうか。私の生涯の愛であるこの子どもたちのために、私は全力を尽くしてきたのです。

「神父さまのことを言ったのではありません」

「では、誰のことですか、私の代わりをつとめている人のことですか。校長、副校長、先生方、担任のことですか。しかし、彼らもみな、授業と仕事の犠牲者だとは思いませんか。神のみ摂理から任せられた子どもたちのために、彼らはその青春を惜しげなく犠牲にしているではありませんか」

「そのとおりです、よく知っていますが。でも、それだけでは足りません。もっと大切なことが欠けています」

「それはなんですか」

「子どもたちを愛するだけでは足りません、子どもたちが、自分たちは愛されていると実感できなければなりません」

「では、子どもたちに目がないとも言っているのですか。知恵がないとも言っているのですか。先生たちのすることは、全部子供たちへの愛のためだということが子どもたちは分からないのですか」

「繰り返して言いますが、それだけでは足りません」

「では 何がいるのですか」

「子どもたちの好きなこと、子どもらしい望みに、先生も加わってくれることです。子どもたちはそれを見て初めて愛されているとわかり、自然にあまり好きでないこと、たとえば規律、勉強、自制の中にも愛を悟り、自発的にそれをおこなえるようにならなければならないのです」

「もっとくわしく説明してください」

「休み時間の子どもたちをごらんください」

私は子どもたちを見てから、言いました。「何か別に変わったことがあるのですか」

「何十年も子どもの教育にあたっておられるのに、まだおわかりになりませんか。注意してごらんください。先生たちは、どこにいるでしょう」

たしかに、よく見ますと、子どもたちの仲間になっている神父や先生たちは少なく、子どもたちと一緒に遊んでいる人は、もっと少なかったのです。つまり、先生たちは、もうリクリエーションの中心となっていませんでした。彼らの大部分は、子どもたちが何をしているのか少しも心にかかけないで、思い思いにグループをつくり、そぞろ歩きを楽しみながら話し合ったりしていました。ある者は、運動場を見ていましたが、生徒のことは念頭にないという態度でした。ある者はまた、遠くから監督していましたが、子どもが悪いことをしても、注意することもしませんでした。たまに、注意する者がいても、けわしい顔つきでしていました。なかには、生徒の遊びに加わろうとするものもいましたが、生徒たちは、先生や目上をわざと避けていました。

友人は、さらに続けました。

「以前のオラトリオでは、神父さまはいつも子どもたちといっしょだったではありませんか。特に休み時間には、あのよい時代を覚えておいでですか。天国のよきこびのようでした。私たちは今もなお、なつかしくあの時代を思い出しています。ほんとうに、私たちの規則は愛でした。そして、私たちはあなたに、なんの秘密ももっていませんでした」「ええ、そうです。あのころ、子どもたちは、私の姿をみると大よきこびでそばに押し寄せ、話しかけてきました。私から直接よい勧めをきいて実行に移そうと、みんなベストを尽くしていました。しかし今は、私を訪ねる人も多く、用事がふえて、体の調子も思わしくないのです。あのころのようにはできないのです。おわかりでしょう」

「そうでしょう。でも、神父さまがおできにならなくなったのなら、なぜ、あなたのサレジオ会員たちが、神父さまの手本にならないのですか。彼らに、神父さまがなさっていたように子どもたちを扱いなさいと、なぜ要求なさらないのですか」

「私はそうするように言いかせています、声がかれるほど繰り返しています。しかし、残念なことに、多くの人は、昔のような犠牲を惜しんでいます」

「そして、彼らは、わずかのことを怠って、多くを失います。多くのものとは、自分たちの苦勞です。子どもたちの好むことを先生たちも好むようにすれば、子どもたちも、先生たちが勧めることを行うようになるでしょう。そして、苦勞も軽くなるにちがいありません。オラトリオがこのように変わった理由は、ある子どもたちが、目上の人たちを信頼していないことにあります。むかしは、すべての子どもたちが、素直に目上に心を打ち明け、目上たちを愛し、速やかに従っていました。しかし今は、目上は目上として考えられ、父や兄や友人とは考えられていません。ですから、子どもたちは、目上を、愛するのではなく、恐れています。そこで、もし、イエズスへの愛のために、みんなの心を一つに、魂を一つにしたいと望むなら、不信という致命的な壁を打ち壊して、真心からの信頼を取り戻さなければなりません。母親が小さな子どもを導くように、従順によって生徒を導かなければなりません。そうすれば、むかしの平和とよるこびとが、再びオラトリオにおとずれるにちがいありません」

「この壁を打ち壊すには、どうすればよいのでしょうか」

「子どもたちに親しむことです、特に休み時間に。親しみがなければ、愛は示されません。愛が示されないなら、信頼も望めません。愛されたい人は、まず自分の愛を相手に見せなければなりません。イエズス・キリストは、小さなものとともに小さくなって、私たちの弱さを耐え忍ばれました。彼こそ、親しみを教える方です。先生が教壇に立つだけなら、たんに教師であって、それ以上のものではありません。しかし、生徒といっしょに休み時間を過ごすなら、兄弟となります。もし、神父が説教台から説教しているだけなら、当然のことで、自分の務めを果たしているにすぎません。しかし、休み時間にも生徒と共にいて、ひと言でも語り合うなら、それは、愛のことばとなるのです。子どもたちが遊んでいるとき、耳もとでささやかれたことばは、どれほどたくさんの人々を改めさせたことでしょう。愛されていると知っている子どもたちは、愛をもって応えます。そして、愛されている目上は、なんでも得られます。とくに若い人々から。この信用が、生徒と先生のあいだに、電流のような密接なつながりをつくれます。子どもたちは、素直に心を打ち明け、心配ごとや欠点をつつみかきさずに、話します。この愛があれば、先生は、苦勞も不自由も、そして、生徒の忘恩も欠点も過ちも耐え忍びます。イエズス・キリストは、傷んだよしを折らず、けむる灯芯を消しませんでした。教育の模範は、これです。この模範に従うなら、先生はもう、虚栄心にかかられて動くこともないでしょう。傷つけられた自尊心の仕返しとして罰することも、ほかの先生が自分より上手に教えられるのをきらい、ねたみのためアシステンツァの務めから手をひくこともないでしょう。先生はもう、生徒

の愛と尊敬を自分にだけ集めようとして仲間の先生がたを中傷したりすることもないでしょう。実はこんなことをする人は、生徒の偽善的な愛だけを買うことになるのですが。またある先生は、一人の生徒に心をうばわれ、この一人だけにへつらって、ほかの生徒を無視してしまうということもなくなるでしょう。人をはばかり、とがめるべきものをとがめない先生もいなくなるでしょう。まとめて言えば、この真の愛があるなら、神のみ栄えと人々の靈魂の救いだけを求めるようになります。この真の愛の代わりに、冷たい校則をかざそうというのですか。なぜ、ドン・ボスコ先生がきめた規則を、もう守らないのですか。愛情深く見守って生徒の過ちを予防する教育法の代わりに、命令する人にとっては、もっと楽で、もっと簡単にみえる命令と規則だけの方法を取り入れるのですか。今度は、この規則を制裁をもって守らせないといけなくなり、そこに反感と苦しみとを生むでしょう。それでも、守られないなら、目上は軽蔑され、無秩序が起こるでしょう。親しみがなければ、どうしてもそうなります。

もしオラトリオに、もとの幸せが再び訪れることを望むなら、もとの教育法に立ちかえるほかはありません。つまり、目上は子どものためにすべてとなり、子どもたちの心配や不満をよるこんで聞き、親心をもって子どもたちの行いを注意深く見守り、自分に任せられた彼らの靈的、物的利益の世話のために心を尽くさなければなりません。そうすれば、子どもの心は、閉じられることもなく、心をだめにすることもなくなるでしょう。目上が絶対に許してはいけないのは、破廉恥な態度があったときだけです。友だちのつまずきとなる生徒をひとり残すよりも、罪のない生徒をひとり退学させる危険をおかしたほうがましです。神の侮辱となるようなことを知ったときは、担任たちは、つまずに長上に報告する重大な義務があると考えなければなりません」

そのとき私はききました。「こういう親しみと愛とによる信頼が盛んになるようにするには、なにがいちばん効きめがありますか」

「学校の規則を正確に守ることです」

「それだけですか」

「招かれたときの一番のごちそうは、心からのもてなしです」

この卒業生が話しているあいだにも、私は、休み時間の子どもたちを見て、深い悲しみにうちひしがれていました。疲れ果てて、もう耐えきれないほどになったので、急に、身ぶるいがして目がさめました。みると、私は、ベッドのそばに立っていました。足がはれてひどく痛み、立っていられないほどでした。だいが夜がふけていたので、あとでこのことを私の愛する子どもたちへ書き送ろうと決め、眠ることにしました。

こんな夢を見るとひじょうに疲れるので、見たくありません。翌日、全身が疲れきっていましたので、夜早く休めたらいいと思いました。しかし、ベッドにつくとすぐ、例の卒業生が、私の前に現わ

れていました。この卒業生にむかって、私は尋ねました。「あなたが言ったことを、かならずサレジオ会員に知らせたいと思いますが、オラトリオの子どもたちには、なんと行ってやったらよいでしょう」

すると、彼は答えました。「目上と先生と担任とが、生徒への愛のために、どれほど努力し、多くの犠牲に耐えているかを生徒も認めなければなりません。もし生徒への愛がなかったら、先生たちは、これほどの犠牲に耐えてまで働くことはできないでしょう。謙遜は落着きの泉です。完全は、ただ天国にあるだけです。不平を言わないようにしましょう。不平をもらせば、心を冷たくするからです。そして、とくに神の恩恵と愛のうちに毎日を過ごすようにしましょう。神と仲よしでない子どもは、心に安らぎがなく、友だちとも仲良くできないからです」

「では、私の子どもたちのなかに、神と仲よしでないものがあるというのですか」

「ええ、そうです。これが不満の第一の原因です。ほかは、すでに神父さまが知っておられるので、ここで繰り返しません。それより先ずこの原因を取り除かなければなりません。事実、信頼がないのは、隠したいことのある人だけです。自分の秘密がばれると、恥ずかしいこと、不利になることを知っているからです。同じように、神との平和がない子どもは、心配して落ち着かず、不安になり、従順のくびきを苦痛に感じ、ちょっとしたことにも怒り、すべてを悪く考え、目上たちは自分を愛してくれないと思いこんでしまいます」

「でも、オラトリオでは、たくさん子どもたちがよく救いの秘跡を受けてごミサに与ったりしているではありませんか」

「たしかに、そういう子どもはたくさんいますが、彼らに根本的に欠けているものは、心を改める決心です。自分の罪を告白はしますが、いつも同じ過ち、同じ誘惑の機会、同じ悪い習慣、同じ不従順、同じ怠りを言い表すのです。こうして何か月も、何年間も、同じことを繰り返しています。ある子どもは、卒業までこの調子です。このように神に許しを願ったのでは、無意味というか、あるいは、たいした意味がないのです。そのために、心に平和が得られません。ある子どもが、この状態で神のもとに呼ばれたら、どうなることでしょうか」

「そういう状態にいる子どもたちが、オラトリオにたくさんいるのですか」

「オラトリオにいる子どもの数からいえば、少ないでしょう」といって、彼はその子どもたちを指さしました。

私は、その子どもたちを一人ひとり見ました。この子たちの心を見ると深い痛みを覚えました。このようなことは手紙に書きたくはありませんので、帰ってからその子どもたちに直接話をすることにしますが、ここで私が言いたいのは、今改めて 私は神に祈って、堅い決心をすべきだとい

うことです。でもこの決心は、口先だけではなく、行いをもって示さなければなりません。つまり、コモッコやドメニコ・サビオ、ベズッコやサッカルディのような少年が私たちの中にまだいる、ということを示さなくてはなりません。

最後に、私は友人に、「まだ、何か言いたいことはありますか」と聞きました。すると彼はこう答えました。

「みんなに。大人も子どもも、扶助者聖マリアの子どもであることを思い出すようにと言いついてください。世間の悪を避け、互いに愛し合い、良い行いで神と聖母の栄光を示すように彼らをここに集めたのは、マリアさまご自身です。

多くの恵みと不思議で、生活と勉学に必要なものを与えてくださるのもマリアさまです。

聖母の祝日も近づきました。悪魔が魂を滅ぼすために、生徒と長上の間に建てた不信感という壁を、聖母のおん助けによって打ち壊すように、みんなに言いついてください。」

「この壁が取り壊せるでしょうか」

「もちろんです。大人も子どもも みんながマリアさまのために何か小さな犠牲を献げる覚悟で、言ったことを実行に移すなら、必ずできるでしょう」

彼が話を続ける間も、私は子どもたちを見つづけていましたが、永遠の滅びへの道を踏み出している子どもたちを見ると、いたたまれないほど苦しくなって目が覚めました。この夢の中で、私は多くの大切なことを見ましたが、これを全て伝えようと思っても、今はその暇もありませんし、手紙には書かないほうが良いこともあります。

話をまとめることにしましょう。愛する子どもたちのために生涯をかけてきたこの年寄りか、あなたたちに何を望んでいるかわかりますか。それはただ一つ。生徒と教師とのあいだに、キリスト教的愛と信頼のきずながあったあの日、ありのままに素直に心を打ち明けたあの日、みんなにとって愛とまことの喜びのあの日が、再び戻ることです。あなたたちの靈魂のために私が望んだことが、きっと果たされることを期待します。

あなたたちは、このオラトリオに入学できたことが、どれほどの幸運かをよく理解していないかもしれせん。神のみ前に、私は断言します。

一人の子どもがサレジオ会の学校に入っただけで、聖母マリアは、彼をとくべつに保護してくださいませ。



わかりますか。愛徳が命令する人にも従う人にもあるならば、私たちのあいだには、聖フランシスコ・サレジオの精神が栄えることになるでしょう。

私の愛する子どもたちよ、私にはあなたたちに別れを告げて、永遠の旅路につく時が近づいています。

(秘書記 ここでドン・ボスコは口述を中断しました。目には涙を一杯ためていましたが、それは悲しみのためというよりは、この上ない優しさのためでした。それは彼のまなざしや声からわかりました。少し間をおいて彼は続けました)

私は、司祭、神学生、愛する生徒の皆さんに、神が望まれる正しい道を示しておきたいと思いません。このことに、先週の金曜日、5月9日 教皇さまは、真心からの祝福を祈ってくださいました。

キリスト信者の扶助者聖マリアの祝日に、私はあなたたちとともに、私たちの最も愛すべきおん母のご絵のもとにいるでしょう。この大きな祝い日を、この上なく荘厳に行くことを望みます。ラゼーロ神父さまとマルキジオ神父さまが、食堂でおいしいごちそうができるように配慮してくださいましょう。扶助者聖マリアの祝い日が、過日私たちがみな、天国に集まって祝うべきあの永遠の祝祭の序曲となりますように。

1884年5月10日 ローマにて